

思想の隅景

蜂蜜が供される。百メートル以上の海拔差で渓谷の上と下に分かれるオゴルの村落も、近年ではすっかり観光名所と化した。子供たちが仮面を描いた絵を売りに来る。五日おきに市場が立つと、近隣から人々が一日ばかりで集まってくる。言語も習慣も異なる人々が、長々と冗談を言い合い、友好の挨拶を交わす。

現地の経済が観光に立脚する以上、いままら観光公害を嘆いてもはじまらない。当の我々ご一行様が、結構なお客なのだから。これを良い機会に、現地の子供たち、少年たちとできるだけ会話を楽しんだ。農産物以外はすべて外国からの輸入に頼らねばならず、経済が自立するのは難しい。子供たちは文房具が欲しくてたまらず、青年たちは自転車やオートバイを持つのが夢だ。観光客相手の青年たちのなかには、恐ろしく利発な者も交じる。その彼らにとって、噂に聞くパリやブリュッセルに行くことは、夢のまた夢だ。だが現在の生活から脱出することは、結局は生まれ故郷を捨てることになるだろう。

オートバイは日本製、自動車はダットサン、トヨタの輸入品。結構な数の観光客を送り込むジャボンへの関心は高い。だが、トーキョーからのお客さんたちは、フランス語がしゃべれない。会話にならず友人になれない、と彼らはこぼす。経済格差にあぐらをかいた物見遊山。それはかつての植民者の特権を我が物とする「犯罪行為」だ。だがそれに謝罪してみても、誰も救われない。観光の現場には、いわば世界の裂け目がその口をぽっかりと開けている。マリの旧友ムサ・ソから招かれた東西・南北の「相互人類学」の会合。だがホテルや学校の保護された環境で交わされる、学者のおしゃべりが、なんと空虚で無意味に思えたことだろう。むしろ夢に溢れる子供たちの眼差しが眩しかった。日本の若い世代に、現地の若者たちと、未来の事業を分かちもつ機会を与えることができれば、だが何ができるのか。

連載⑨
ニジェール河で考えたこと

第三世界で観光客を演じる経験について

国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学助教授
稲賀繁美

サハラ砂漠の南、ニジェール河流域に広がる内陸国マリ。黄金の都と呼ばれたトゥンブクトゥは、首都バマコからロシア製プロペラ機で二時間。ジンガレイベルのモスクは世界遺産に登録された。だが集落の佇まいから往時の反映を推測するのは難しい。かつて一世を風靡した森本哲郎の『そして僕は迷宮に行った』を読み直してみても、著者が現地では何れも発見できなかったのが、よく分かる。砂漠からの隊商がはじめて安息を得た土地だが、現在でも日中は停電する日常。砂漠の丘陵で催されるトゥアレグの人々の踊りも、すっかり観光化した。夜明けとともに鳥が鳴き、無数の蚊が、すさまじい羽音で襲ってくる。

さらに南に下ったモプティは、かつてはトゥアレグが砂漠の彼方から運搬してくる岩塩の集積地だった。ゴンドラにも似た川舟が行き交い、西アフリカのヴェニスという異名を取る。稲作を含む豊かな穀倉地帯。赤く塗った革貼りの丸い藁帽子のブルの人々が放牧に、ホソの人々が漁猟に、そしてソンガイやバンバラの人々が農業に従事する。キャピテーヌと称する白身の魚も旨い。西に片道二時間ランド・ローヴァーを飛ばし、ニジェール河を小型のフェリーで渡る。少女たちは全裸で泳ぎ回り、いたって屈託ない。水の貴さが実感される。その先に、泥の大モスクを誇るジェンネの町。パロセロナのカウティの奇想を思わせる自在な造形。市場では魚の干物が大量に売られている。

反対にサヴァンナの中を東に片道三時間で、パンディヤガラの大渓谷に至る。魁偉な容貌の岩盤が風化に耐えた丘の周辺に、バオバブの大木に挟まれて、特有の三角屋根の穀物貯蔵庫をもったドゴンの集落が点在している。乾季の干上がった谷間では、老若男女が、終日畑に水を撒いている。玉葱の青いほどの新緑が一面に広がり、周囲の灰色の岩場と対比されて、目に痛いほど美しい。昼食には、これもドゴンの人々特産の

思想